
廃屋

スミレコ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃屋

【Nコード】

N7294X

【作者名】

スミレコ

【あらすじ】

私と先輩二人はある日、廃屋へと肝試しをすることになり…。ホラー短編です。

あれは私が大学生だった頃。遊びに呆け、いくら時間があっても足りないと思っていたときの話です。

私は二人の先輩とともに、肝試しをすることにしました。よくある幽霊スポットです。

そこは私たちの大学からさほど遠くはない場所にある廃屋で、今は立ち入り禁止になっているところでした。

しかしオカルト好きのB先輩が、ある情報を手に入れました。

その廃屋が今度取り壊されることになり、そのおかげでまた入ることが出来るようになったというのです。これはB先輩がその工事をしている知り合いから聞いた話で、まだそれほど知れ渡っていないのだと自慢げに話をし、私を肝試しに誘ってくれました。

私は二つ返事で承諾しました。私も少々なりともそういうものに興味がありました。

B先輩は同級生であつたA先輩を誘いました。A先輩は靈感が強いという噂があり、B先輩は半ば強引にA先輩の同行を承諾させたそうです。

当日。幽霊スポットという非日常的な場所に行くことで浮き足だっていた私とB先輩に、A先輩は真剣な声で言いました。

「もしこの場所に普通じゃないものがいたとしても、俺は何も言わない。何らかのサインを送ると思う」

霊のことを「普通じゃないもの」というA先輩の話はこうです。まず、霊に遭ったときに一番重要なのは、霊に自分の存在を悟らせたことを、気づかせてはならないことだそうです。気づかされると、霊に隙を与えてしまう。もしそうなれば、霊に憑りつかれてしまうこともあるのだそうです。

だから自分のような靈感のある者ほど、霊を見ても、ここに霊がいるなどと高々に口にするという愚かなことはせず、知らないふりをするのだということです。

だから、もし霊がいても、教えるようなことはしない。危ないと感じたら、すぐに引き揚げることをA先輩は私たちに約束させ、三人は廃屋へと足を踏み入れました。

廃屋の中はとても静かで、もちろん人気などはありませんでした。しかし…何といったらいいでしょう。気配というのか空気というのか、それとも単なる気のせいなのか、私は何らかの異様さを確かに感じたと思います。

ですがそれも一瞬のことだったので、私は気にせず先頭に立ち、そのすぐ後ろを二人の先輩が歩いていました。

部屋に入ってしまったからです。私の背中の服が引っ張られました。

振り向くと、A先輩がB先輩と話していました。私のすぐ後ろにいたA先輩は特に変化はなかったので、私は気のせいかと前を向き

ました。

しかしそれから何度も、私の服が引つ張られました。怪訝に思つてA先輩の顔を伺うと、暗い場所で分かりにくかったのですが、かなり顔が強張っていました。

そこでようやく、私は気づきました。霊を見た場合、口には出さずに、何らかのサインを送ると。その場合、霊には気づかれないよう、装う必要があるということに。

またしても私の服が引かれました。

A先輩は今確かに、何かを見ているのです。そしてそれは、口には出せないものなのです。

A先輩が何も言わない私に焦れたのか、自分から、そろそろ出ようと言いました。その声には平静を装おうとしてもできない、かなりの焦りを含んでいました。

B先輩は、なんでだよ、まだ来たばかりじゃねえかと口を尖らせました。あれほどA先輩が、帰るといったら従うようにと言ったのに。

私の洋服はさっきよりも強く、何度も何度も引つ張られています。

私はとても怖くなりました。いったい先輩は何を見ているというのでしょうか。

しかし口に出すことはできません。霊に気づかれてはいけません。ですからA先輩は口には出さず、私にサインを送っているのです。

私はなるべく平然を装い、帰りましょう、ここには何もなさそうですからと、一緒になってB先輩を説得しました。二人に押し切られたB先輩は、腑に落ちない顔をしていましたが、しぶしぶ従ってくれました。

車に來ると、どっと汗が出ました。まるで背中にあつた大きくて重たい憑物が、一気に落ちてしまったかのような、何ともいえない疲労に襲われました。私には靈感などあるはずもないのに、おかしい話です。事実、B先輩はぴんぴんしていました。

A先輩も、ぐったりとしていました。まさかあんなに強い氣配があるとは、と溜息を吐いていました。

「何を見たのですか？」

私は思い切つて訊いてみました。知らないよりも知るほうが、このときは楽なような氣がしたのです。

A先輩は思いつめたような顔をしながら、しかし首を横に振りました。

「分からない…近くに氣配はあつたんだが、どこに、何がいたのかまでは…」

「では、どうして私の服を…」

そのとき、A先輩は不思議な顔をしました。

「服？ 何のことだ？」

私のそのときの、顔色の失い方といったら、きっと尋常ではなかったことでしょう。

私は何度も先輩に確認しました。私の服を引っ張つたのはA先輩ではないのかと、サインを送るといつていたのではないかと。

A先輩は、それに対し、完全に否定しました。自分は私の服なんて少しも触っていないと。ましてや、何度も強く引っ張った覚えなど少しもないと。

そもそもサインを送るような余裕がなかったので、A先輩は帰ろうとだけ強引に言ったというのです。

A先輩は嘘をついているようには見えず、また、からかっているような余裕も見られませんでした。そして私が背中中の服を引っ張られていたと聞くと、さっと顔色を失い、だからあんなに近くに気配があったのか、と呟いたのです。

……私はそれ以上考えないようにしました。

しかし一度ついてしまったイメージはなかなか払拭することはできません。

私とA先輩との距離はとても近く、密着しているといっても過言ではありませんでした。だから私は先輩だと思っただけで疑わなかったのです。

なのにそうじゃないのならば、誰が私の服を引っ張ったのでしょうか？ ほかに誰かがいたとでもいうのでしょうか？ あんな狭い隙間に！

そして先輩がしきりに帰ろうと言ったとき……まるで引き止めるかのように何度も強く引っ張られたあの感触を思い出すと……私はどうしても手足が震えてしまうのです。

もし私が何も知らず……先輩に、何故服を引っ張るのか訊いてしまっていたら、どうなっていたのでしょうか。

先輩が自分は知らないと言ったと首を横に振り、ならば何が服を引っ張っているのか、その原因をよく見ようと目を凝らしたのならば……私は

…。

あの廃屋は、それからしばらくして取り壊されました。

そして今になって、私は思うのです。私の服を引っ張った誰か、あれは子供だったのではないかと。

あのときは異様な雰囲気飲まれて気づかなかったのですが、服は下に引っ張られた気がします。そしてそれは、背丈の小さな人間にしか出来ないような仕草だったと思います。

まるで、小さな子供が、母親の服を引っ張るような。

それがどういう意味を持つのか、何もなくなつたあの場所の前で、もう私には知る由もないのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7294x/>

廃屋

2011年11月13日05時20分発行